

息子戦死 母は毎日駅に来た

無職

(福井県 72)

最近よく思い出すことがあります。

私は1943(昭和18)

年生まれ。育ったのは福井県の小さな村で、最寄りの駅まで徒歩で1時間あまりかかるような所です。中学、高校は自転車です。30分ほどかけて通学しました。

昭和30年代の中ごろのことです。朝に時々、通学の道で1人の中年の女性を見かけました。しま模様しま模様の黒っぽい着物のその人は、最愛の息子が戦死し、正気を失い、毎日のように死んだはずの息子を駅まで迎えに来てると聞きました。隣村の人で往復10分ほどの道のりです。往路を行く姿は前のめりで小走り

でした。今思うと、帰りは悲しさで重い足取りだったろうと、本当に悲しくなります。

私の父も西太平洋のペリリュー島で戦死し遺骨も戻りませんでした。祖父母は気丈でしたがあの女性に劣らぬ悲しみを味わったはずで、私の同年配には遺児が大勢いました。戦死した父たちの命と引き換えに得た憲法9条は非常に重いものです。

安全保障関連法案を何が何でも押し進め成立させようとする安倍政権に怒りを覚えます。16日には福井市で「戦争法案強行採決許すなパレード」に参加しました。平和を享受してきた者として次世代にそのまま受け渡したいと、つくづく思います。